

## 原著論文

### 演劇活動の導入による総合的な音楽アプローチ —筋ジストロフィーの高等部生徒による音楽表現活動—

尾崎 祐司  
石川県立医王養護学校

### The general music approach which is due to the introduction of the dramatic activity

— The music artistic activities by the high school student of the muscular dystrophy —

Yûji OZAKI

Iô School for Physically Handicapped Children of Ishikawa Prefecture

#### Abstract

The purpose of this research is to clarify the effectiveness of introducing "the dramatic activity" into the music learning by the student of the muscular dystrophy.

It decreases that the high school student that the symptom of the muscular dystrophy gets worse can do it by oneself. Therefore, that the activity to pursue the completeness of the performance to "make a constant frequency timbre and a sound physically and arrange them well in terms of time," such as "singing a song", "playing a musical instrument" and "dancing" is the music learning which is desirable really for them is a problem.

Then, the author thought that the student of muscular dystrophy tries to discover an expression method to be able to make use of "their power of expression" in by oneself or pursue the possibility from the learning process by introducing "the dramatic activity" to the music learning and he set a scene.

#### I 問題

筋ジストロフィーとは、「遺伝子の異常のために骨格筋の変性が進行する病気の総称」<sup>1)</sup>である。今回の研究で取り上げる高等部の生徒3名は、Duchenne型という筋ジストロフィーである。進行度を表すステージ分類では、Swinyardの分類、旧厚生省研究班による分類<sup>2)</sup>では以下の通りである。

〈対象生徒〉

Aさん(高等部3年) Duchenne型 男

8段階中7段階

Bさん(高等部3年) Duchenne型 男

8段階中7段階

Cさん(高等部2年) Duchenne型 男

8段階中8段階

もちろん個人差はあるものの、分類表から17～18歳という高等部生徒の筋ジストロフィーの進行具合は要介助の度合いが高い範疇にあることがわか

る。すなわち、生活年齢が高まり一日の生活の中で介助の割合が増えるにつれ、自力で「できること」も減少してくる。そのため、いつのまにか介助を受けることが生徒本人にとって日常の環境となる。例えば、定期的に問われる排泄の有無、定時の食事、衣服の着脱、入浴などの介助があげられる。しだいにこれらの生活パターンが当然の環境となることで感謝の言葉が減少し、様々な物事を頼もうとする意志・意欲も減少しつつある。

その結果、自発的に自分で行動を決定する機会や思いを表現する手段が減少してくるにつながつていると考えざるをえない。

このことは、音楽活動においても例外ではない。すなわち、生徒が「歌を歌う」「楽器を演奏する」「踊る」等、音楽表現の中心的活動が進行度の上昇とともに徐々に不可能なことへと変化する。特に、演奏行為という「物理的に一定の周波数や音色の音

を出して、時間的にうまく配列」<sup>3)</sup>するための「技能」を積み重ね演奏の完成度を追求する活動が難しくなる。その結果、生徒がある感覚を通して得た感動を表現しようとしても、その手段に「制約」があるため、しだいに「表現しよう」という意欲が乏しくなっていく。また、仮に生徒がある音を「演奏」という手段で「時間的にうまく配列」できることを教師が確認したとしても、その技術的行為は果たして社会への出口に近い高等部の生徒が必要としている学習行為なのであろうかという疑問もある。それは教材の扱い方を間違えると、音楽室で単なる教科の時間を消化することで終結してしまう危険性をはらんでいるようにも感じる。彼らにとって望ましい音楽学習とは受動的でない活動のはずである。

このように考えると、筋ジストロフィーの生徒に携わる音楽教師は、筋肉に負担が少なく、しかし積極的に自己を表現できる音楽表現について検討し、その教育方法を開発しなければならないものと考えらる。

## II 目的

研究の目的は、音楽表現の方法に制限のある筋ジストロフィーの生徒に対して、演劇活動を導入することが、生徒の「音楽表現力」向上に効果がある、ということをはっきりとすることである。演劇活動の導入が、音楽学習上有効ではないかと考えた理由は、宮台氏が言う「物理的条件」<sup>4)</sup>を満たす活動としてのみならず、その学習過程で生徒自身が表現可能な方法を発見し、効果音や台詞・演技などについて自分の意見を主体的に主張し、「内容を充実させよう」という自発的な姿勢を引き出すことが期待できると考えたからである。

## III 先行研究との違い

伊勢田氏は特別支援教育での「劇的活動」の効果をはっきりと述べている。その効果について「(一) 生きる力をひろげる」「(二) からだを育てる」「(三) ことば・認識を高める」「(四) 意志・感情を育てる」という4つの観点にまとめている。彼は「劇的活動」については「きちんとした劇ではないのです。劇のような状態をしていたり、劇と似たような性質をもったりしているだけなのです。もう少しいえば、

劇としてのまとまりをもっていないのが劇的活動だということになるでしょう」と定義している<sup>5)</sup>。さらに、「それ(劇的活動)が、劇としてのまとまりをもっていないということですが、それは例えば、だれがどの役をどうつくり、どのように演ずるかということも予めはっきりしてはいません。(中略)これらのことはすべて、子どもたちの活動の中で自由につくられ、活動の途中のある偶然によって、どのような方向へも発展していく可能性があります。」<sup>6)</sup>と「劇的活動」の詳細について付け加えている。

筆者が言う「演劇活動」とは、伊勢田氏の述べる「偶然」とは異なり、生徒が台本制作にかかわり自らの演技をはっきりさせる過程を踏む。そして、音響効果も考案するなど、音楽学習の中で「演ずる」までの方向を明確にしている。その方向の過程に、生徒の①場面の想像力、②意志や感情表現(場面に適した効果音や効果音楽の選択力)、③ことばや認識力、などを向上させる効果があると捉えている。

## IV 方法

### 1 対象生徒の実態

2002年5月に丸山氏らが行った実態調査結果によると、学校で音楽が取り入れられている場面で「よく行われる音楽活動は？」という設問に、①歌(98.4%)、②楽器(91.5%)、③動き(80.6%)、④鑑賞(69.1%)、⑤混合した活動(48.5%)、⑥その他(6.4%)であったと報告されている<sup>7)</sup>。

筆者はこの調査報告結果に基づき、生徒がこれまで学習してきた「歌」「楽器」「動き」「鑑賞」の4項目についての「音楽表現力」を把握する目的で、先に述べた対象生徒3人に口頭質問を行った。

#### 1) 「歌」について

AさんとBさんは「呼吸が続かないため、思うように歌えない」、Cさんは気管支切開しているため「発声ができない」という返事であった。

筋ジストロフィーの症状は加齢とともに呼吸機能も徐々に低下する。Aさんは就寝時のみであるが、呼吸器を装着している。

#### 2) 「楽器」について

指を動かせる程度の筋力のためか、3人とも自信のある返事がなかった。筆者が「スイッチを押せる力はあるか？」と質問したところ、「形状によって

は押せる」という返事であった。しかし、3人とも「リズム通りに音を出すのは難しい」とも付け加えた。

AさんとBさんは、パソコンの光学マウスは操作できる筋力を持っている。Cさんは光学マウスの操作も困難なため、普段はベッド上で障害者用のマウスを利用している。(写真1)



(写真1) 機器とスイッチの接合部

このマウスはUSB接続した本体にON-OFFのできるスイッチ(形状を問わず)を装着する。右手の親指と人差し指の間にスイッチを挟みデスクトップ上のポインタを操作する仕組みである。(写真2<sup>9)</sup>)



(写真2) スイッチで操作するCさん

### 3) 「動き」について

AさんとBさんは、授業で音楽が鳴っているときに電動車椅子のコントローラーを自分で操作し動き

回ることは、「可能である」という返事であった。Cさんは、人工呼吸器を車椅子に搭載しての移動は可能であるが、定期的に吸痰等の医療的ケア<sup>9)</sup>が必要のため、保護者または看護師の付き添いが必要である。また、電動車椅子のコントローラーの操作を自力でできないため、介助者による車椅子の押し歩きという方法になる。

### 4) 「鑑賞」について

Aさんは特に好みのジャンルは「ない」とのことで、「なんでも聴く」という姿勢であった。BさんはNHK紅白歌合戦のVTRを好むなど、テレビから日本の流行歌の情報を得ていた。Cさんはインターネットを利用し、オリコンチャートで最新のヒット曲をチェックする。データをダウンロードするなどコンピュータを活用し、ベッド上で聴いているとのことであった。

### 5) 「音楽表現力」について

以上の実態から生徒の「音楽表現力」を表現するための「技術」<sup>10)</sup>と捉え、考察した。「歌」を歌うことは呼吸機能の関係で長い歌詞は難しい。「楽器」については、微細な手指の動きで発音できる仕組みのものであれば演奏は可能である。「動き」については、AさんとBさんはコントローラーを自分で操作して電動車椅子で移動することは可能。「鑑賞」については、AさんCさんは自分で好みの音楽を探して「聴きたい」という思いを持っている。

上記の本校生徒への聞き取りの結果から「技術」とは確かに宮台氏が言う「修練や道具による負担の軽減」から自己表現可能な物理的条件を満たしていくことである。しかし、そこには生徒自身が「現在の状態はこのようであるが、次はこのようになりたい」という過程がない。

すなわち、「技術」とは生徒本人が「できない」と思っていたことを「できること」と再認識し実行する力のことであり、その力を再認識できる具体的方法を教師は提示しなければならない。

## 2 「演劇活動」の導入

筆者はこの考察の結果、生徒が持っている「技術」を生かすことのできる活動の一つとして、「演劇活動」を生徒に提案した。

理由は先に述べた3つの効果を期待しているからであるが、さらに「演劇活動」という総合的な活動

の中に生徒自身が自分の「技術」を生かすことのできる場面を発見できることを願った。

### 3 結果の処理と分析方法

3人の生徒が1年半の期間に学校行事で発表した3種類の演劇の制作過程における行為行動の変化を記録した。データ項目は発言回数などカウントできる12の評価項目を設定し、授業ごとにカウントした。その他、数値化は難しいと考えられた制作過程における生徒の発言から読みとれた心情変化の様子などは観察記録を取った。

## IV 結果

### 1 実践概要

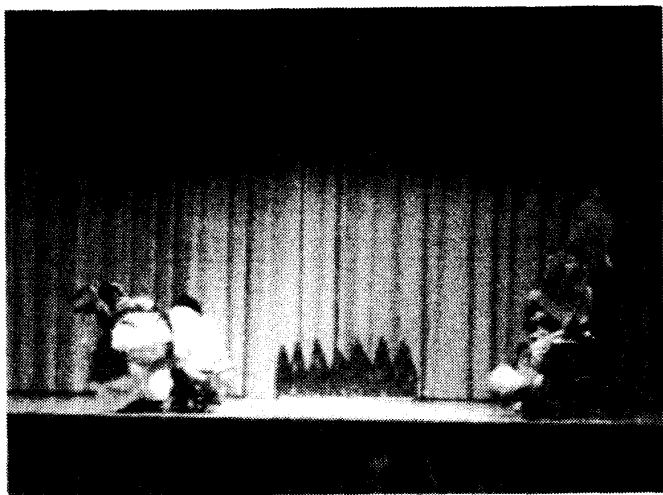
まず、台本制作にあたって題材とする図書選びを行った。本を選ぶにあたり、次の観点を設けた。

- ①演技時間が10分程度で収まること
- ②効果音や効果音楽の素材を加えた舞台にすること。
- ③出演者全員が自分の「技術」を生かすこと

この観点に基づいて生徒と図書室で本を選定した。その結果、観客にストーリーが分かりやすいよう「複数の人物が同じ行為を繰り返す内容」の作品を選ぶことにした。

#### (1) 一作目 「かえるの親子」

一作目の題材として「かえるの親子」を選んだ。この題材はイソップ物語の一話で有名である。発表にあたって、Aさんから「笑える内容にしたい」という提案があり、団体名も「C組喜劇団」と決めた。台本は『にほんご』<sup>13)</sup>に掲載されている「共通語」と「京都弁」「秋田弁」の方言で語る「かえるの親



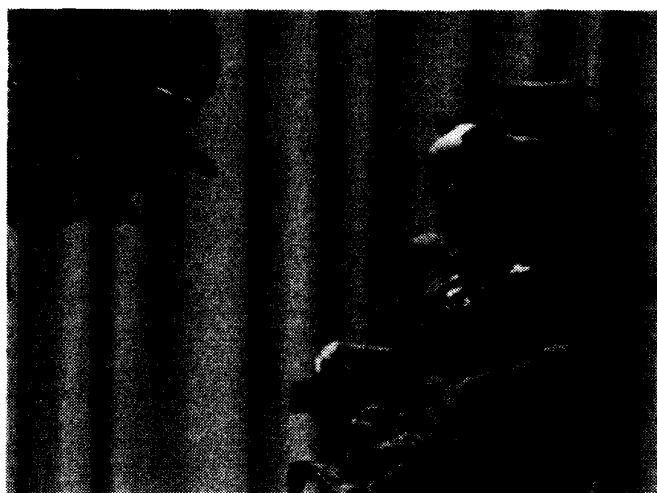
(写真3)「京都弁」のかえるの親子

子」をモデルに作成することとした。ちょうどこの頃「パペットマペット」という「かえる」と「うし」のパペット人形を手にしてショートコントを行うタレントが日本テレビの番組に出演していた。そのため、演技を見ている他の生徒は親しみを持って鑑賞できると考え、劇のモチーフとして取り入れてみることにした。(写真3)

#### (2) 二作目 「金の斧銀の斧」<sup>12)</sup>

二作目も同じくイソップ物語から選んだ。一作目の「かえるの親子」の演技が好評だったことから、生徒Aの「まじめなキャラクター」と生徒Bの「とぼけたキャラクター」を対比させれば、「楽しんでもらえるのではないか」と生徒Aが提案してきた。そこで、後半の隣村の木こりが現れるシーンをどのように構成するか話し合った。Aさんから「木こりと言えば“与作”だ」との意見があり、Bさんの登場場面では「与作」<sup>13)</sup>をバックに入場するという効果音楽を用いることにした。(写真4)

結果はAさんの提案とBさんの演技がうまく噛み合って好評であった。



(写真4)「与作」を演ずるBさん

#### (3) 三作目 「歌舞伎?『勸進帳』」<sup>14)</sup>

三作目はモチーフとして、歌舞伎「勸進帳」を選んだ。日本の伝統芸能として、かつ地元の石川県小松市にある「安宅の関」が題材となった歌舞伎の演目でもあることから、学習すべき教材として取り上げることを生徒に提案した。

歌舞伎「勸進帳」の出演人物である源義経については平成17年度にNHKの大河ドラマ「義経」の放映

もあったためか、生徒は義経についての筆者の問いかけに知っていることを答えてくれた。

この作品では劇の台本を作成する前に、あらすじの確認をした。本校の図書室にあった現代語訳により生徒への読み聞かせからはじめた。生徒にとっては弁慶と関守の富樫氏との問答で仏教の専門用語が多数出てきたため、各語の説明が必要であった。

原作の文語的表現から観客である他の生徒が容易に理解できるよう、口語的な台詞を作成することにした。その際に弁慶の「専門的な仏教用語（頭巾・篠懸・甲冑・金剛杖・錫杖など）のどれをどのような表現で残すか」ということが話題になった。その結果、あまりに説明が必要な用語は見ている方々にとって「何を問われているのかわかりにくい」ということから使用しないこととした。生徒が舞台上で身につける山伏の服装のうち「帽子や服装のデザイン」に関することを台詞として使うことにした。

台詞は、以下のとおりとした。(写真5・6)



(写真5) 「富樫」を演ずるAさん

富樫：「頭につけている帽子は何の意味があるのか？」

弁慶：「仏が備えている五種の智を表したものです」

富樫：「山伏はなぜそのような服装なのだ」

弁慶：「不動明王の姿をかたどったものです」

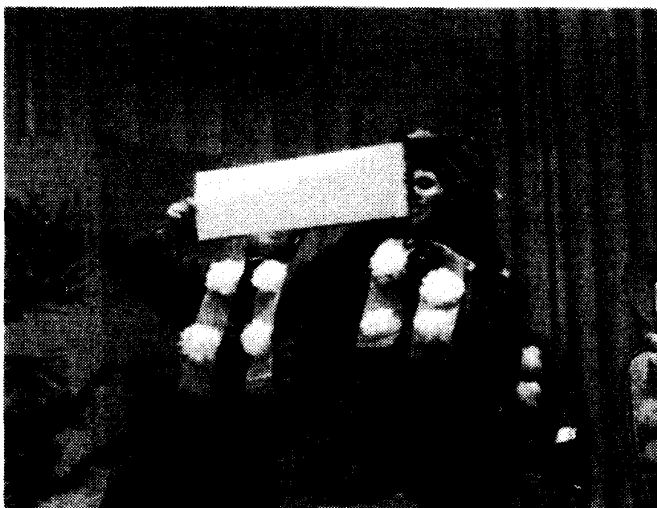
さらに、義経一行が「東大寺大仏殿再建のための寄付を募っている」という説明をする場面では、

富樫：「ちなみにお金の集まり具合はどうだ？」

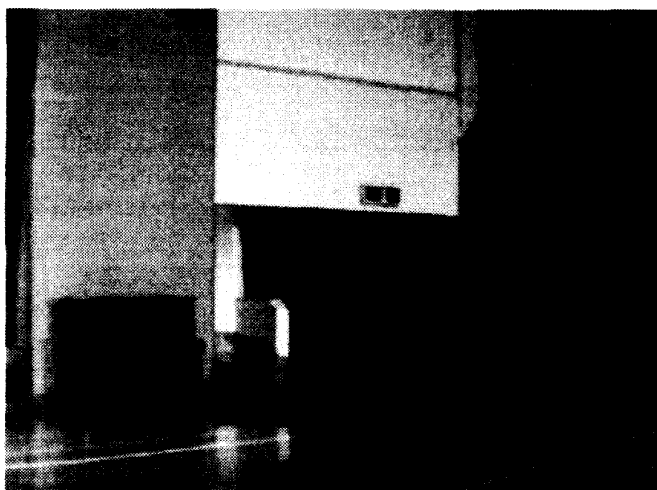
弁慶：「(高い声で) きびしいです！」

この「きびしいです！」という台詞は、Bさんが

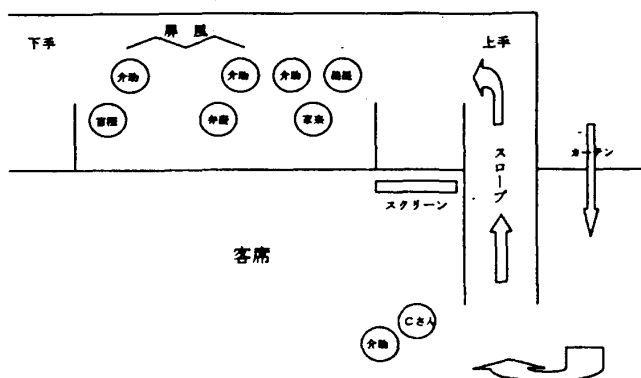
よく口にする言葉で、筆者が台詞としてどこかで生かすことができないか考えていたものであった。演技にあたって、観客である他の生徒はBさんのお決まりの台詞であるため、大喜びであった。



(写真6) 白紙の「勸進帳」を読み上げる弁慶



(写真7) ステージへのスロープ



(図1) ステージとスロープの配置図

また、この「勸進帳」の台本作成にあたり、最も生徒が苦心していたところは、弁慶が最後に義経一行を追いかけて花道から去っていくシーンをどう表現するか、ということであった。体育館のステージで練習する際に、筆者が車椅子でステージに上るためのスロープ（写真7）（図1）を設置したところ、「このスロープを花道にみたてては？」という提案がAさんからあった。Bさんがスポットライトに照らされながら降りてくる、という構図を描くことができた。この発言は、ステージ上での動きしか考えてこなかった筆者にとって、大変斬新な発想であった。

## 2 生徒の行動変化と学習効果（観察）

### (1) 生徒Aについて

Aさんは1年生の2月に本校に転入してきた。転入当初は発言も少なく、介助を求めるとき以外は自分の思いなど発言することが少ない生徒であった。AさんはクラスメイトのBさんのユニークな発言や行動のチェックが日々の楽しみになっていたところもあり、二作目の「金の斧銀の斧」の制作過程から「与作」にしたなら「うける」のじゃないか」など少しずつ「見る方を楽しませよう」、という内容の台詞を提案するようになってきた。

また、登場場面等に鳴らす効果音楽にこだわり、一作、二作と重ねる毎に何種類も聴いた中から選ぶようになった。

三作目の「勸進帳」のときにはAさんの台詞までも覚え、練習中の際にBさんが台詞に詰まると「○だよ」と教え合う姿までも見られるようになった。

### (2) 生徒Bについて

Bさんは自閉的傾向があり、しゃべり方にも特徴があるが、発言がユニークなため親しまれやすい性格である。

「金の斧銀の斧」ではBさんが演ずる“隣村の若者”がうそを付くシーンで「はい、そのとおりです」と得意の裏声で堂々と演技するなど彼の表現力を引き出すことができた。

一般的に自分からの提案はあまりなかったが、Bさんも効果音・効果音楽の選択では自分の意見を主張するような変化がみられるようになった。

三作目の「勸進帳」の弁慶役で問答されるBさんは「不動明王」「五種の智」など普段使わない言葉の発音に苦労していたが、本番では明確に発音するこ

とができた。この「勸進帳」では前二作に比べ、電動車椅子による移動という「動き」の表現が台本に載せられた。スロープからステージへの乗降、富樫から酒を勧められた弁慶が、義経一行を関所から先に旅立たせるために「舞い」を円状に回転して表現する場面など、筋ジストロフィーの生徒の「動き」という表現の可能性を追求できたのではないかと考える。

### (3) 生徒Cについて

Cさんは気管支切開し人工呼吸器を装着しているため、医療的なケアが必要である。そのため、日々の学習は教師と病床で行っている。1年生のときは、行事で「学校へ行こう」と誘っても「知らない人ばかりなので嫌だ」というかたくなな姿勢で、劇の一作目と二作目は見学も拒み続けていた。三作目の「勸進帳」のときは2年生の冬であった。三作目ではCさんが「演劇活動」に参加できるようになる」ということを第1の目標とし、様々な働きかけを行った。

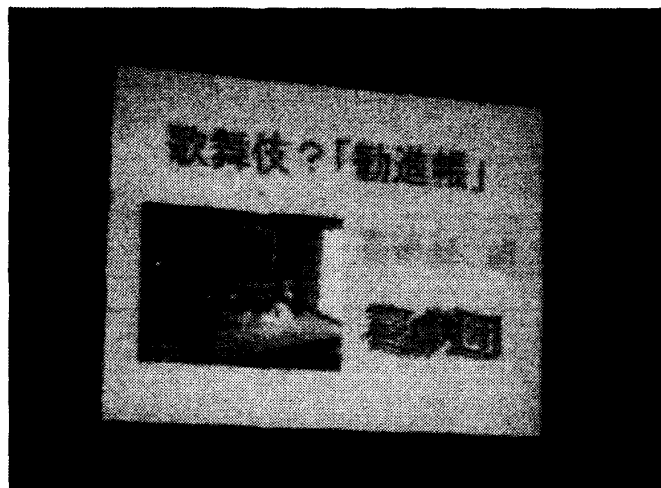
この頃、Cさんはベッドサイドに保護者からパソコンを新調してもらった時期で「ワンキー・マウス」（写真1・2）でポインタ操作の練習中であった。筆者はCさんがAさんBさんと「演劇活動」に「参加したい」という意志を持つために、Cさんへのヴィジョンの提示が必要と考えた。まず、AさんBさんと「勸進帳」の演劇を計画していることの説明、Cさんが持っている「技術」で参加できる役割の検討、DVDの映像<sup>15)</sup>を鑑賞し本物の迫力ある演技からイメージを養うなど、Cさんへの細かい支援を積み重ねた。

彼の授業のときはAさんBさんの発言と台本の変更点をこまめに伝え、本番のステージのビデオを見せるなど学校の状況に敏感に対応できるよう配慮した。

その結果、パソコンで「プレゼンテーションで劇にまつわる写真の紹介などをやってみないか？」との筆者の問いかけに快く承諾してくれた。ここでのCさんの変化はパソコンという「道具」が彼の「自己表現可能な物理的条件を満たす」ことにつながり、「①場面の想像力、②意志や感情表現」の向上に効果があったと考えることができる。

本番前にはAさんとBさんのステージ練習を撮影

したビデオをみながら、自分のパソコンでプレゼンテーションの練習を重ねた。本番のときは無事ステージ下でパソコンを操作し、自分の役割を果たすことができた。(写真8)



(写真8) Cさんが操作するプレゼンテーション

## 2 データ分析

以上の3回の「演劇活動」における3人の生徒の変化を分析する方法として、客観的に回数をカウントできる12項目を設けた。項目設定の観点は「効果音提案」「効果音選択」「効果音楽提案」「効果音楽選択」「台詞提案」など自己決定と生徒が感じた思いや考えを表現する力が向上したと筆者が認識できる項目である。

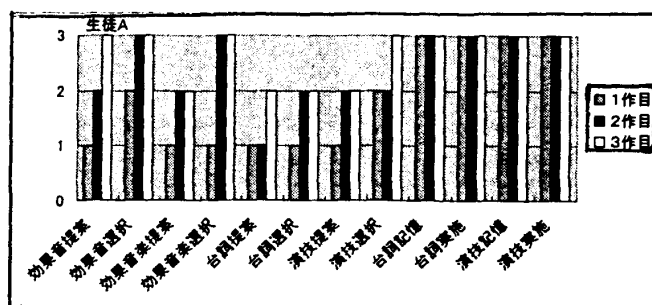
それぞれの項目について、筆者が設けた評価基準(「3回以上:3」「1~2回:2」「0回:1」)に基づき3段階(1~3)で評価した。3回の「演劇活動」での変化の数値をグラフ化したものが(図2, 3, 4)の棒グラフ(生徒別)である。

グラフから読み取れることは、AさんとBさんともに台本ができあがるまでの項目で、効果音・効果音楽の提案選択、台詞の提案選択、演技提案選択で評価が1作目の作品よりあがっていることが読みとれる。

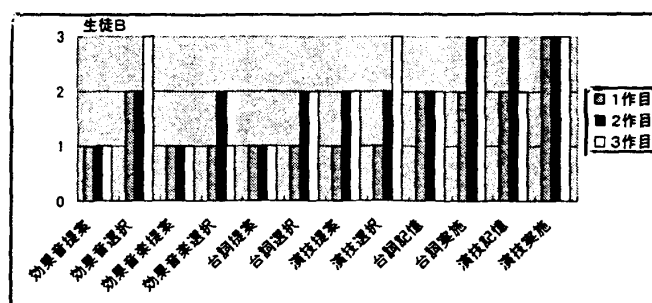
## V 考察

### 1 演劇の導入

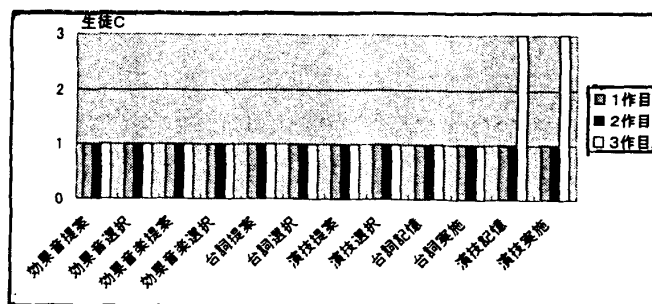
このように劇の回数を重ねるごとに、自分たちの可能な「表現力」を自ら追求・発見し、それを「生かそう」という活動へ取り組む姿勢を引き出すこと



(図2) 評価項目ごとの生徒Aの効果音・台詞・演技に関する回数



(図3) 評価項目ごとの生徒Bの効果音・台詞・演技に関する回数



(図4) 評価項目ごとの生徒Cの効果音・台詞・演技に関する回数

ができた。提案する内容も自分たちの特徴や特技を生かした台詞の作成や電動車椅子での動作を工夫するなど、姿勢の変化がみられた。すなわち、生徒の間でお互いにかにいて効果的な舞台になるかを考えて実行できる「表現力」を彼らは習得できたと考える。

### 2 筋ジストロフィーの生徒の音楽表現力

一般的に音楽学習は学年の進行とともに演奏技能の向上が期待できる。しかし、筋ジストロフィーの生徒は「このように表現したい」という感性が育ったとしても、生活年齢の向上とともにその表現手段

が機能上制限されてくるという現実がある。その手段をどのように補うかが研究課題である。

### 3 筋ジストロフィーの生徒の音楽学習

現在の医学では進行する筋ジストロフィーの負担軽減が主な治療法の観点である。高等部に在籍する筋ジストロフィーの生徒の進路も医療的ケアが必要となるため、その殆どが病院への継続入院となる。

卒業生の様子では、外部からの情報収集の手段はテレビ放送、インターネットの利用が中心である。また、情報発信は電子メールを利用されている方が多い。生活の中で音楽と触れ合う空間も病棟生活では限られる。

このような実態をふまえて「音楽学習」とは何なのか、筆者はその概念について今回の実践研究で考えさせられた。それは、「肉体的な動作にハンディキャップのある生徒が卒業後に必要としている音楽は何なのか」という課題である。この課題の追求が、筋ジストロフィーの生徒が卒業後も積極的に音楽と接点を持つことにつながる、と言っても過言ではないと考える。

#### 付記

本論文で記載した写真については、該当する生徒に掲載の許可を取っている。

#### 注

1) 西間三馨他 (2003) 『病弱教育 Q & A PART V 病弱教育の視点からの医学事典』ジューズ教育新社, p. 212

2) (表 1-1, 1-2, 1-3) 参照

花山耕三 (2002) 「進行性筋ジストロフィー症のリハビリテーション」『診断と治療 2002 年増刊号』, p. 130

3) 宮台真司 (1991) 「行為と役割」『社会学の基礎』有斐閣, p. 64

宮台氏は社会システムの説明のために社会学の基礎概念として「行為」と「役割」の必要性を述べている。「演奏行為の特質」として「演奏する」という行為はメロディを心の中で思い浮かべるだけではなく、引用箇所のような物理的な形式が要求されると言っている。

4) 宮台真司 (1991) 「行為と役割」『社会学の基礎』有斐閣, p. 63

宮台氏の考え方に基づく、「演劇をする」という身体行為は意図するだけでは、演劇を行うことにならない。舞台での発声や体の動きなどの物理的な条件を

満たせるようになったとき「技術」を習得したということになる。

5) 伊勢田亮 (1982) 『障害児の遊び・リズム・劇』ぶどう社, p. 17

6) 伊勢田亮 (1982) 『障害児の遊び・リズム・劇』ぶどう社, p. 17

7) 丸山忠璋・平林真紀 (2002) 『特別支援教育における音楽活動の役割 ～盲・聾・養護学校に関する実態調査より～』, p. 3

8) 「ワンキー・マウス」という製品名で「国立療養所箱根病院を拠点として活動している技術ボランティアの福士さんが作製しているマウス」『ひらけごま』  
<http://www8.plala.or.jp/hirakegoma/index.html>

9) 「医療的ケア」とは (1) 口腔内・鼻腔内吸引 (2) 経管栄養 (3) 気管内吸引を日常的に必要とする生徒への処置の総称。

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課・特殊教育調査官：古川勝也氏によると、医療的ケアの必要な児童生徒は (H14. 5. 1 現在) 肢体不自由養護学校在籍児童生徒の約 21% 3, 500 名 他の養護学校、概ね 1,000 名程度在学割合増加傾向と報告されている。

10) 宮台真司 (1991) 「行為と役割」『社会学の基礎』有斐閣, p. 63

注 4) で述べた「技術」の習得について、宮台氏は「ここでの技術とは、修練や道具による負担の軽減をさしている」と定義している。筆者は「音楽表現」のために「修練や道具による負担の軽減」がなされる「技術」を「音楽表現力」と捉えている。

11) 安野光雅 (1979) 『にほんご』福音館書店, pp. 174-177

12) 植西 聰 (2001) 『へたな人生論より イソップ物語』河出書房新社, pp. 37-39

13) 北島三郎 (2001) CD 『北島三郎 (4)』日本クラウン CRC-1204

14) 守随憲治 (1966) 『古典文学全集 21 歌舞伎名作物語』ポプラ社, p. 159-171

15) NHK (2005) 「勸進帳」『“新・華麗なる招待席”』BS2 2005. 5. 7 放送



(表 1 - 1) Swinyard の分類

1. 軽度のよたよた歩調 (waddling gait) と脊椎前弯状態にて体移動する。高所に昇る能力は適当 (介助なしに階段をよじ昇る)。
2. 中等度のよたよた歩調と脊椎前弯状態にて体移動する。昇る能力に支障がある (階段を昇るのに支えが必要)。
3. 高度のよたよた歩調と著明な脊椎前弯で体移動。階段を昇ることはできないが、普通の高さの椅子から立位を取ることができる。
4. きわめて高度のよたよた歩調と著明な脊椎前弯での体移動。普通の高さの椅子から立ち上がれない。
5. 自分で車椅子を操作する。車椅子での姿勢はよい。椅子での日常生活はすべて可能。
6. 車椅子を扱うのに介助がいる。椅子を動かすことはできるが、ベッドや椅子での活動には介助を必要とする。
7. 車椅子操作に介助と後方の支えが必要。短距離しか車椅子を動かせない。よい姿勢をとるために後方の支えが必要である。
8. ベッド生活患者。最大限の介助がなければ日常生活動作は何もできない。

(表 1 - 2) 機能障害度 (厚生省筋萎縮症研究班制定)

動 作		障害度 (Stage)
歩行可能	階段昇降可能	手の補助不要 1
		手の補助必要 2
	坐位 (床上) からの起立	可能 3
	歩行	可能 4
歩行不能	這行	四つ這い 5
		その他 (いざり, ずり) 6
	坐位保持	可能 7
		不能 8

(表 1 - 3) 上肢機能の段階分類

1. 500g 以上の重量を両手に持って外転→直上挙上
2. 500g 以上の重量を両手に持って外転位保持
3. 重量なしで両手を外転→直上挙上
4. 重量なしで両手を外転保持
5. 重量なしで片手の前腕水平保持
6. 机上で肘伸展による手の水平前方移動
7. 体幹前屈の反動で肘伸展を行い手の水平前方移動 (机上)
8. 体幹前屈の反動で肘伸展を行ったのち手関節および手指の運動で水平前方移動 (机上)
9. 前腕回旋, 手関節および手指の運動による前方水平移動 (机上)